

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創始しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

オリンピックイヤーに 日本馬術のオリンピック歴を振り返る

言 わずもがなだが、今年は各国がロンドンにライダーを送りこむオリンピックイヤーだ。その41の国と地域に、もちろん日本も含まれている。

ここ20年でオリンピックにおける馬術競技の出場者枠が定まった。障害飛越には75人、馬場馬術には50人、総合馬術では75人、つまり3競技トータルで200人の出場が見込まれている。

この41カ国・地域から集う200人のライダーには世界トップレベルの選手とともに、あまり見馴れない選手も含まれる。これはオリンピックが標榜する世界最高の選手が集まる場であるとともに、グローバルイズムを象徴するイベントでもあるため、馬術があまり浸透していない地域、たとえばアフリカ諸国にもチャンスが与えられるためだ。その結果、馬術の盛んではない国から、今回代表から外れた西ヨーロッパの馬場馬術の選手なら獲得するであろうパーセントより10パーセント以上低い結果を出す予想される代表選手が送り込まれることになる。

これは世界オリンピック委員会(IOC)が世界馬術連盟(FEI)に選手選出方法において求める微妙な均衡だ。世界トップ馬場馬術のグランプリレベルの競技者50人にチャンスが与えられる(各国から3人のみという条件はあるにしても)べきだという考え方の一方で、アンティグア・バーブーダ(カリブ海東部の国)、モロッコやウクライナといった国の取り組みを認め、オリンピックに参加するこ

との意義を称えられるべきだという考え方もあるのだ。

馬術競技のメダル争い

障害飛越では掛け値なしで世界レベルの国がロンドンに集まる。唯一の例外がアイルランドで同国は個人のみ出場になる。15カ国からそれぞれ1チーム4人のライダーが出場し、このうち10カ国はメダルを取っても不思議ではない。この10カ国のうち7カ国は西ヨーロッパでイギリス、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダ、スウェーデン、スイス、3つはアメリカ大陸のアメリカ、カナダ、ブラジルだ。日本は2人の個人選手が出場予定だ。

馬場馬術ではチーム参加の11カ国の中でイギリス、ドイツ、オランダがメダルの争奪を繰り広げるだろう。オランダがこれまで何度かのオリンピックで勝利の定席にいたドイツを引きずり降ろそうとして果たせなかったがこのロンドンでそれが実りそうだ。ただし、皮肉なことに、その席には馬場の新勢力、イギリスが座ることになりそうだが、そのほかでメダル候補と目されるのはアメリカ、スウェーデン、デンマークだ。52年から98年までつねに両方、もしくはいずれかがチームでメダルを得ていたスイスとロシアがロンドンにはチームを送りこめない。90年代、そして2000年代初頭に勢いのあったスペインの馬場チームがロンドンでも出場するが、10年前の勢いはどこへやら。

総合馬術では14カ国のチームが



昨年行われた総合馬術のテストイベントのうち馬場馬術の様子。実際のオリンピックでもグリニッジパーク内に競技場が設けられる。
©Kit Houghton/FEI



総合テストイベントのクロスカントリー競技でのマイケル・ユング選手。上方に子午線で知られる旧王立天文台が見える。©Peter Nixon/FEI

ロンドンに出場する。日本はそのうちの1カ国で5人のライダーを送り込む予定だ。14カ国のうち8チームがメダル争いに絡むと予想される。それは西ヨーロッパからドイツ、フランス、イギリス、スウェーデン、北アメリカからアメリカ、カナダ、環太平洋からはニュージーランドとオーストラリアだ。

日本馬術の オリンピック黎明期

日本は障害飛越に2人、馬場馬術に1人、総合馬術に5人、計8人がオリンピック代表として出場する。8人という数字は前2回のオリンピックより多く、96年、2000年と同数だ。かつて、東京オリンピックでは10人、88年の

ソウルでも10人、92年のバルセロナでは9人が出場した。

日本選手がオリンピックの馬術競技に初めて出場したのは28年のアムステルダム大会だった。このとき馬場に2人、障害と総合にそれぞれ1人を送り込んだ。この中にはその後の50年代、60年代の日本の馬術界を発展させた城戸俊三と遊佐幸平がいた。32年に日本は5人の馬術選手をロスアンゼルスオリンピックに送った。障害に2人と総合のチームの3人だ。そしてこの時、大評判になったのがウラヌスに騎乗した西竹一選手。障害で金メダルを得た。これまでにオリンピックの馬術競技で日本が獲得した唯一のメダルだ。4年後の36年、ベルリンオリンピックでは西選手とウラヌスは20位だった。このベルリンで日本は馬場の出場は0だったが、障害と総合ではチームとしてそれぞれ3人馬を送り、なんと障害では団体で6位につけた。

48年のロンドンオリンピックでは日本の馬術選手は出場しなかった。しかし、52年以降のすべての大会に日本は馬術の選手を送っている。もちろん80年のモスクワを例外としてだ。この大会には馬術の強豪国がほとんどボーイコットをした。52年のヘルシンキオリンピックでは障害でひとり喜多井利明選手のみが出場だった。56年のメ

ルボルン大会では馬の検疫のためオーストラリアに馬を搬送できなかったため、馬術のみスウェーデンのストックホルムで行われた。このストックホルムに障害の川口宏一選手、太田邦宏選手の2人が出場した。60年のローマ大会では日本は障害団体として3人が出場した。

東京オリンピック以降

64年は日本で開催された。この東京オリンピックで日本は3競技すべてに団体として出場した。つまり障害と馬場に3人馬、総合に4人馬が代表として選ばれたのだ。馬場の団体出場はこれが初めてであり、これに次ぐ2度目は4年前の北京オリンピックだ。

68年のメキシコオリンピックでは、障害のチームと総合の個人1人馬が日本代表として出場した。障害の福島正選手と杉谷昌保選手が初出場でこれに8年前のローマに出場した荒木雄豪選手を加えたチームを結成した。そして福島選手と杉谷選手は72年のミュンヘン

でも出場を果たした。ミュンヘンではこの2人に竹田恒和選手、高宮輝千代選手を加えた4人が日本の団体として出場した。このミュンヘンで唯一の馬場の日本代表が井上喜久子選手だった。井上選手は64年の東京大会で初出場、そして88年のソウルで3度目の出場を果たした。

76年のモントリオールで日本は障害と総合が団体として出場した。障害では杉谷選手と竹田選手が2度目の出場を果たした。総合の代表は衛藤賢二選手、石黒健吉選手、植田元選手の3人。このモントリオールで私はクロスカントリーのコースチェックの際にこの3人と会話を交わした。そして94年の栃木で開催されたCSIW競技会のレセプションでこのプロモント（モントリオール大会の馬術競技会場）の3人組と再会したことが懐かしく思い出される。

84年から04年まで日本は毎回オリンピックに障害チームを送っている。そして88年から2000年まで同じく総合のチームを送った。馬場については84年に個人2人、88年に個人1人（前述の井上選手）が日本代表となった。この中でもっとも目立った戦績を挙げているのは総合チームだ。92年、バルセロナで7位、96年、アトランタで6位という記録を残している。障害については東良弘一選手が76年のモントリオールに続き、92年のバルセロナに出場、小畑隆一選手は76年モントリオール、84年ロスアンゼルス、04年アテネと3回出場している。同様に障害

の中野善弘選手は84年ロスアンゼルス、88年ソウル、96年アトランタと3度の出場を果たしている。非常に高い資質を持つていた戸村崇選手は惜しくも94年に亡くなったが、84年、92年と2度出場した。総合では岩谷一裕選手が88年、92年、96年と3回出場している。杉谷昌保選手の息子、泰造選手は96年、2000年、04年、08年と4度のオリンピックを経験している。

08年の北京オリンピックでは馬術競技は香港で行われた。日本からは6人が出場。馬場団体4人、障害個人1人、総合個人1人という内訳だ。この中で驚くべき経歴の持ち主が法華津寛選手だ。23歳の時、東京オリンピックの障害の代表に選ばれ、4年後、馬場チームの一員として出場したのだ。おそらく彼はロンドンへの切符を手にするだろう。

総括すると、日本馬術界は1926年から2008年までに98の競技で64人の馬術選手をオリンピックに送りこんできたのだ。
*3月にオーストラリア、オランダ、アイルランドがチーム出場権を得た。
**これが書かれた時期には、まだ法華津選手は出場権を獲得していなかった。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。



同様に総合テストイベントの障害競技。©Kit Houghton/FEI